

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2017年度第3回研究会（通算第6回目）

日時：2018年3月19日（月）14:00-19:00, 2018年3月20日（火）9:30-13:30

場所：京都大学農学部・生物資源経済学第1会議室（3月19日）、キャンパスプラザ京都・龍谷大学サテライト教室（3月20日）

主催：AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」

出席者：鶴田 格、石川博樹、安溪貴子、小松かおり、坂梨健太、杉山祐子、杉村和彦、田中利和、松田正彦、藤本 武、藤岡悠一郎、大山修一、加藤珠比、足達太郎、藤原辰史、安藤和雄、岩島史、竹藤佳世

発表1：藤原辰史（京都大学）

「農業技術史研究の射程：トラクターを中心に」

1892年にアメリカで登場したトラクターは、どのように世界中の農業を変えたのか。本発表は『トラクターの世界史』（中公新書）の内容をそのあとに明らかになった事実を含めながら論じたものである。アメリカでは、ダストボウル（砂嵐）と大恐慌の引き金となり、ロシアでは農業集団化のかなめとなった。レーニンは、10万台のトラクターがあれば、農民たちは共産主義に賛同してくれるだろうと述べている。20世紀の大きな事件の背後には、いつもトラクターが存在する。とともに、トラクターはこれまでの家畜の代わりとして入ってきたため、家畜との違いから、各地で反発ももたらされた。アメリカでは、トラクターが糞尿を生み出さないし、石油を買わなければならないことが批判され、ロシアでは、共産主義の権力の象徴として、あるいは、「アンチ・キリスト」として恐れられた。農民たちがトラクターに石を投げたという記録も残っている。単位面積あたりのトラクター普及台数が世界でトップの日本は、その歴史をひもとくと、歩行型トラクターの開発から始まっている。その舞台となったのは、広大な児島湾干拓と、その周辺でポンプを製造修理していた鉄工所が多数存在していた岡山県南部であった。歩行型トラクターが乗用型トラクターに変わるのが1980年代。日本でのトラクターの歴史もまた、機械化貧乏、水田での機械化など、特異な道筋を辿っている。

発表2：田中利和（AA 研共同研究員，東北大学）

「現代エチオピア中央高原の犁農耕文化複合：畜力による耕作と有機物輸送の実践に着目して」

アフリカで遅くとも 2000 年前から営まれてきた、エチオピア中央高原の犁農耕の実践を農業文化複合という視点で捉える必要性を論じた。牛耕実践を、構成する 3 つの要素(耕牛・農具・犁手)と諸問題および対処について分析した。その結果、耕牛は温順で死亡率は低く、犁は製造修理の容易さと携帯性を備え、犁手は、男性が担い、子供の遊び場や酒場といった日常の場において、操作等の技術が伝承される仕組みがあることを示した。犁耕実践における作業効率は耕運機に比べ一見低いが、耕牛 2 頭 1 組以上所有する世帯は 83 日という 3 ヶ月の耕起期間内に余剰をもって耕しきれぬ耕起力を有しており、その余剰力は、5 つの耕牛貸借制度によって、「耕牛非所有農民」に共有されていた。雷神信仰が共有を促進する役割を果たしていた。テフの稈が牛耕開始期に不足する牧草を補う飼料として利用されていた。家畜が有機物を家屋に集め、庭畑を肥沃にしている役割を担っていることを示した。現代エチオピア中央高原には、耕牛、農具、犁手をはじめ、文化、社会制度など諸要素が有機的に関連した、犁農耕文化複合が存在し、人びとが直面する諸問題に柔軟に対応できるしくみが潜んでいた。

コメント：鶴田 格（AA 研共同研究員，近畿大学）

「犁からトラクターへ」

まず西欧と日本の農業発展の過程を理論化した、飯沼二郎による「農業革命の一般理論」を紹介した。飯沼によれば、西欧型の休閒農業では土地面積を拡大するのが経済合理的であるが、それに対して中耕農業では土地面積を拡大するより、狭い土地にたくさんの労働を投下したほうが合理的である。それゆえ、休閒農業では技術の発展方向が労働粗放化（機械の発達）に向かうのに対し、中耕農業では労働集約化（道具の発達）を目指す。こうしたそれぞれの農業類型における（技術の）「本来の発展方向」の議論が、果たしてアフリカの農耕技術の変化をとらえるうえで役に立つのかどうかを議論した。また、アフリカにおける犁とトラクターの普及について、エチオピア以外のアフリカではクワ耕作が主流で、犁は早いところでは 19 世紀、遅いところでは 20 世紀にはいつてから（多くの場合トウモロコシなどの商業的生産と関連して）導入され始めたことを指摘した。タンザニア中部の後進地帯では 1990 年代にはいつてようやく（人口過密化により移動耕作ができなくなったことと連動して）犁が普及しはじめ、また近年では政府の農業近代化政策の後押しをうけて、トラクター耕が急速に普及しつつあることを論じた。

発表3：坂梨健太（AA 研共同研究員，龍谷大学）「熱帯アフリカにおけるカカオの導入と焼畑農耕社会の変容」

カカオが19世紀後半にアフリカ大陸に導入されて以降、現地の農業や社会にどのような影響を与えたのか、すなわち「カカオ革命」について考察した。先行研究では、農民の所得向上、労働力の賃労働化、土地の私有化が、カカオによる現地へのインパクトとして挙げられてきた。また、カカオは条件がよければ50年以上も実をつけ続けるため、焼畑を主生業として移動を繰り返していた農民の定住が促されたことも、この樹木作物の一つの影響と言える。このようにカカオは現地にインパクトを与えてきたが、本報告では、必ずしも労働が完全に賃労働化されるわけでも、人びとが一定の場所にとどまるわけでもないことを、カメルーン南部の事例から紹介した。調査地では狩猟採集民と農民との社会関係や、これまで行われてきた生業活動が、カカオ生産と密接に関わっている。つまり、カカオ導入時には地域の農業や社会に影響を与えたかもしれないが、カカオが浸透していくにつれて、農民が自らの経済や文化にそれを読み込んでいったことが示唆できる。今後は、移民が大きな影響を与えたガーナやコートジボワールなど、他のカカオ生産地域との比較を通して、アフリカにおける「カカオ革命」のインパクトを探っていく。

発表4：安藤和雄（京都大学）

「在地の技術の考えとその事例：在来技術との違いと農村開発での意義に注目して」

バングラデシュでの農村開発の経験から生まれた「在地の技術」の概念について、一般に使われる「在来技術」概念との違いを念頭におきながら解説した。在地の技術の発想の原点は1970年代後半～1980年代にかけてのバングラデシュでの農村調査の経験にある。一般の農村調査や農村開発には未来と過去はあるが現在が欠落している。データをとって分析するのは、その時点ですでに客体化された過去のことであり、また過去のデータを投影した未来をみているにすぎない。問題を解決しようとする、不確定性に満ちた現在に自分を投げ込むしかないのだが、その「現在」は分析的に捉えることはできない。そこから在地性の自覚の問題がでてくる。フィールドワークをするのは、客観的なデータをとるためではなく、いわば在地性を自覚するためである。その意味で、フィールド調査を主体とする地域研究という学問分野は、あきらかに既存の学問のありかたとは異なっている。単に現地の事情を理解するだけでなく、現地の問題と向き合うことを前提に理解することを目指す、つまり他者（客観的な調査者）を当事者に変化させる力のある学問が実践型地域研究である。こうした「在地性」に関する報告者の考えを踏まえて、バングラデシュやミャンマー、チベットにおける「在地の技術」の実例を紹介しながら、技術を（外来技術、

在来技術など) 外形的に評価するのではなく、機能的、主体的な観点から評価しなければならないことを論じた。